

することをよしと心得るものおほく、つひには家作に氣をもむために、身上も不勝手となる者ことに多し、これらさへ歎息のかぎりなるを、又候その方がために、墓地にまでまごつきて、住持に難儀さするものまゝ、あるよし、わが末徒ども、迷惑することなり、それほど墓相にくはしきその方、何しに子を先立つるやうの逆ありしぞ、もとより穢土に住する如夢幻泡影の身として、吾子の天折することさへしらす、たゞ書面の墓相説をあげて、口傳など、のぶること、人はみな書をよまぬものにしたる自許の所爲はなはだすまぬことなり、ことにこれは、太田錦城が世上の家相方位の説をなすもの、流行をうらやみ、種々の家相書を著述して、愚人をたぶらかしたる術計をぬすんで、利を射んと欲せるにて、その方すこぶる黄金家にてありながら、尙卑劣なる金まうけしたがる癖あるは、つひに死して、有財餓鬼とならんことうたがひなし。

〔隨意録〕近世有家相工者、相人之屋室戸牖、以言吉凶妖祥、世俗或惑乎其言、而改造牖戸、更作井竈者、亦不鮮也、不祥有五、東益不與焉、聖人之諭如是矣、而俗人不知焉故也、昔日伊奈大夫、大信相工之言、而其第宅廐庫、悉改造之、後不一年、而患害起於蕭牆中、終亡數世家祿矣、又予所知之人、私有此惑、以變更其牖戸庖厨、工成之日、乃遭祝融之災、災後特受相工之教、而築作之法、專隨其指揮焉、落成未幾、又復罹災、盡爲灰塵矣、於是其人初寤焉。

〔隋書三十四經籍四〕地形志八十卷、庚季才撰宅吉凶論三卷、相宅圖八卷、

〔龍背發秘序〕錦城先生、經ヲ窮ルノ暇、カタハラ家相ノ術ニ通ジ、其書許多卷アリ、文政辛巳ノ年、先生京師ヨリ歸リ、病ノタメニ經ヲ廢ルノ暇、悉ク其書ヲ我ニ傳フ、一日余ニ告曰、夫東張南張ハ、色難持前ナリ、北張巽張ニモ、色情ノ禍ヲ云、北欠西欠ニモ、色情破敗アリ、西張乾張ニハ、二金ノ間ニ離火ヲ生ジテ、二金ノ體ヲ燒キ亡スノ形アリ、離火ハ酒色ナリ、花麗ナリ、汰侈淫佚ノ本ナリ、酒色華美ノ奢侈ヲ以テ、金銀ヲ費耗スルハ、離火ノ二金ヲ燒キ亡スノ形ナリ、登リ龍ノ降り龍ト變ズ